

【小説部門・最優秀賞】

希望

私立愛光高等学校 第2学年 月吉 郁

寝室の窓から、曇り気味の夜空を見上げる。この分なら月はすぐに隠れてしまうだろう。私は読みかけていた本を机に伏せて、机の引き出しの中から線香を一本手にとった。月明かりで青白く照らされている窓辺まで近寄って行って、ライターを手に取る。点火しようとするがうまく力が入らず火が安定しない。力んで震える手を左手で押さえつけて、ようやく弱々しい火を灯らせた。急いで線香を近づける。どこか遠くで走る列車の、タタンタタン、と線路を鳴らす音がときどき響く以外はまったく静寂な私の寝室に、一筋の煙とともに夏草のような甘い匂いが広がった。

そっとそれを香立に据えてから、いまだ震えている右手に滲んだ汗を服で拭った。

パーン！

突然その静寂を破る、けたたましい音になって、私は思わずぞくりとして背筋がびんとなった。それは怒った娘が孫の<sup>シュイシアン</sup>雪香の頬をぶった音だと知っていたからだ。

部屋の外に出て、明かりといえば窓からしか差し込まないような薄暗い廊下の先にある、娘と孫の寝室に向かうと、お香のつんとする匂いとともに、そこには両手を固く握りしめて仁王立ちになった娘と、その足元で頭を守るように小さくうずくまっている雪香の姿が目に入った。

「この馬鹿娘！針なんか落つことして…！足に刺さっちゃったじゃないか。お裁縫をするなら、針を落とすなとあれほど言っているのに…！」

雪香のほうへ近寄って行って、そっと抱き上げると、私を見た雪香はたちまちワッと大声で泣きだした。明日には綺麗に消えてくれそうだと思っていた、前の青あざの上に重なるようにして、頬が真っ赤に腫れ上がっている。

「よしよし、泣くんじゃないよ…いい子だから…」

「本当にあんたはろくなことをしない。何日か前に、熱いお茶を私に向けてこぼしたばかりじゃないか。それでいて、母親の私に睨むような目つきを向けて……！」

雪香を抱きかかえながら娘のほうに体をむける。腕を組んだ娘は怒りでぎらぎらした目を向けていた。

どいつもこいつも私を悪者のような目で見ると、とぶつぶつ悪態をつく娘を残して、私は孫とともにそっと部屋を出た。部屋の外でおろおろしている妻とちらりと目があつた。

私は、小さな手で胸元を握りしめて離れようとしないう雪香を、自分の寝室へと連れて行

った。今日はここで寝るかい、となるべく声を穏やかにして聞くと、小さな頭がこくと動いた。椅子を窓際まで引っ張って行って、そこに腰を掛けると、膝の上に横向きに雪香を座らせた。しばらくあやすように頭をなでていると、目を赤くした雪香がようやく顔を上げた。まつ毛に滲んだ涙が、部屋の明かりを吸い込んできらきら光っている。目を手で拭おうとするのを止めさせて、私の寝間着の袖で涙を拭いてやりながら、私はため息をついてしまいそうになった。娘も幼い頃は、こんなに綺麗な目をしていただけだった。

大人になるにつれて失ってしまうものなのだ、とどこかの詩人のように結論づけようとして、不意に息子の<sup>マオシュイ</sup>卯水の姿が、鮮やかな緑色とともに私の頭にさあっと浮かびあがってきた。

名前もないような小川と、その土手の至る所に茂っている夏草。ぽつぽつと目に入ってくる柳の老木の、陽ざしを受けてどこか控えめに光る木の葉。少し見下ろすと一面にまだ青い田畑が広がっていて、さらにずっと遠くには、群青色の山々が並んでいる。そんななかで、蟬の鳴き声を聞きながら、草の生えていない場所を選ぶようにして私は卯水と黙って歩いていた。

私は時々眼鏡を外しては額の汗を拭い、普段は内向的な卯水に、土手へとなかば無理やり連れ出された理由を考えながら遠い景色を見ていたが、卯水は柳の幹を見上げていたものだから、何を見ているのかと尋ねた。卯水は蟬を見ていると答えながら私にも見せようと指を差してみせた。

しかし、ゴツゴツした幹が目に入るばかりで、私は蟬を見つけられなかった。暇さえあれば蟬を見ている卯水は、図鑑しか知らない私とは違って目が慣れていたのであろう。

私達の間になんか重い空気が漂った。それが伝わったのか蟬はいつしか鳴くのをやめてしまった。風はとっくに止んでいて、葉の重さに耐えきれずにうなだれてしまった草むらが、時々思い出したように揺れ動くのみだった。卯水の規則的な呼吸だけが、唯一の継続した音として私の耳に入ってくるのだった。

口下手な私は黙ってしまった。

しばらく経って、思い詰めたような声色で卯水が尋ねた。

「蟬はどうして成虫になると短命になってしまうんでしょう」

私は少し考えてから答えた。

「きっと、鳴くことに己の力を使い切ってしまうからだよ」

蟬も鳴かなければ長生きできるかもしれない。いやそもそも、ずっと幼虫のまま土の中にいれば、少なくとも生きることにはできるはずなのだ。

卯水にとっては酷なことに違いないこの言葉を吐きだしたら、どんな表情を浮かべただろう。困惑した表情だろうか。それとも私を責めるような目つきをしたらだろうか。

そうして私達は再びおし黙った。時間が動きを止めたようで、一分一秒が長く感じられたが、しかし私はそれでも構わなかった。むしろ、この時間がいつまでも続いてくれたらとさえ思っていたのだ。

幾分穏やかになった陽ざしが、新調されたばかりの軍帽を被った卯水の横顔を美しく照らしていた。

私達は土を覆っている夏草の、なるべくふかふかしてそうな所に腰掛けた。そして太陽が、川面を無数の白い光の粒で照らしながら、緑の地平線の向こうに沈もうとするのを眺めていた。山々から垣間見える <sup>パンタオ</sup>蟠桃のような雲に向かって、数羽のカラスが飛んでいた。

卯水は口元をきゅっと結びながら、真剣な眼差しを遠い山脈の方に向けていた。

私はゆっくりと口を開いた。

「こうして夕日を見ていると、いつか太陽が、私の目の届かない地平線の向こう側でひっそりと死んでしまうのではないかと考えてしまう」

風が吹きだした。夏草を私達もろともなでている。擦り合わされた葉が、さわさわと音をたてている。

卯水が向こうをそっと指差して——その先にはおぼろげに浮かぶ薄茜色の月があった——そしてようやく私に笑いかけた。

「あそこに見える月が、夜になっても光って見えるなら太陽は死んではいません。もし不安になったなら、夜空を見上げて月を探せば良いのです。太陽はその時、向こう側の国々に安心を与えているのでしょう」

私は思わず卯水を見上げた。きっと情けない顔をしていたに違いなかった。夏草のむせ返るような甘い匂いにつつまれて、私は卯水がどこか遠いところへ——私などのつまらない人間には想像もつかないような——歩みを進めているような気がした。

休息を終えた蟬が、この日の最後の仕事といわんばかりに鳴きだした。それに感化された他の蟬たちも次々にときの声をあげた。

卯水はまだ私のことを見つめていた。そしてその目に、父の姿を焼き付けようとする必死さを感じられたから、情けない顔をしているのはお互い様だなと少し口角を上げてみせた。

それを見た卯水はどこか安心したように手を降ろして、私に向き直った。

「考えていたのですが、蟬の一生はとても充実しているのではないのでしょうか」

「どうして？」

「蟬は長生きのために生きているわけではありません。鳴くという目的の為に生きようとしているからです」

だから私は生を全うできるという意味で幸せですよ、と私の目を見つめながら静かに告げた。その時、卯水の姿が急に力をみなぎらせたように感じた。強烈に光り輝いたような気

がしたのだ。

私達はふたたび地平線を見つめることになったが、それもおぎなりに、自然と立ち上がった。理由はわからないが、空が明るいうちに帰ろうと卯水も思い直したのだろう。

「蟬はもういいのか。どうせなら気の済むまで聞いていけばいいのに」

「蟬？」

「出発する前に、故郷の蟬を最後に聞いておきたくてここまで来たのだろうか？」

お前は昔から蟬が好きだったからな、と笑いかける。

その時、夕日に照らされたお前の瞳を見て、何かがひっかかった。どこかで同じような色を見たことがある気がしたのだ。そしてすぐに思い出した。私が若い頃に宝石店で見た、コハクとそっくりだったのだ。そのコハクも店に差し込む僅かな陽ざしを吸い込んで、複雑に輝いていた。

卯水はまるでまったく予想外の返答を聞いたかのように目を見開いた。私達の間だけに少しの静寂が訪れる。卯水はしばらくして気まずくなったように私から視線を外したが、すぐに肩の力を抜いてふっと笑うと、また私に向き直った。

「ええ、もう大丈夫です。気は済みましたから」

そう告げられた直後、私は自分の目を疑った。卯水の瞳が湛えているその複雑な色彩が、海岸に打ち上げられた波が砂浜に馴染むようにずっと周りに溶けこんでゆき、ついにはすがしさを覚えるほど澄み渡った、美しい茶色へと変わっていった——気がしたのである。

驚いて立ちすくむ私の耳に、ささやかな風にのせられて、どこからともなく子どもの歌が聞こえてきた。

ツァン ツァン ツァン  
蒼、蒼、蒼！

一番蟬の声聞けば  
夏草も呼ぶ風の歌

青い田畑と散歩道  
親は後から……

タタンタタン、タタンタタン

線路が鳴らされた音が窓から聞こえてきて、私ははっと我に返った。それから、私を見

上げている <sup>シュエイシアン</sup>雪香 と目があった。

このとても美しい思い出に、走馬灯のように一瞬のうちに触れたらしい私は、それを腕の中の雪香にも見せてやりたいと思って、口を開いた。

「私に息子がいたことは知っているね？」

「お母さんの<sup>マオ</sup>卯兄ちゃんでしょ。でもお母さんが生まれる前に死んじゃったってことくらいしか知らない」

「その話を聞いてくれるかな？」

雪香の目が、嬉しそうな色を浮かべた。見れば見るほど、その眼ざしを除いては、今の娘の顔の輪郭をそのまま小さくしたようだった。私はどのように話せば良いだろうと思いを巡らせながら、窓の方を見やった。

窓の外では、小雨がはらはらと降っていた。それらを見上げると、濃紺の夜空と、まだ僅かに雲から姿を見せておぼろに光る月が目に入った。静寂の夜に降る小雨。翌日には朝の露としてたち消えてしまう小雨……。

私は雪香に、できる限りその綺麗な眼ざしを失ってほしくないと思っている。あと十年はこの家で暮らさなければならぬだろうが、それでも、美しさを目に宿したまま大人になってくれたら——とはいえ、そのことを追い求めるあまり、全ての欲に目を背けて、私のような無気力な生き方になってしまうことまでは望まない。しかしかといって、娘のように、日々の生活の苦勞のために社会に精神をすり潰されて、生への執着から目をぎらつかせながら生き続けてほしいとも思わない。願わくは息子のような——いや、私は孫に早死してほしいわけでもない。となれば、早死もせず長生きもせず、ただ己の信念のままに熱く、それでいて……。

雪香はなかなか話を始めない私に退屈したのか、じっと窓の外を見つめている。こう見ると横顔は息子と似ている。はっきりとは言えないが、どこことなく同じ雰囲気をもっている気がするのだ。

窓からの冷気にあたったためか、雪香の頬の腫れが少し引いていたのを見て、少しばかり気が楽になった私は、背もたれに全身を預けるようにして深く座り直した。

私は目を閉じて、鮮やかな緑色を背景に、卯水とかつて見た土手をぼんやりと思い浮かべた。小川が白くきらきら光りながら、次々に他の小川と合流して行って、ずっと遠くで一本の大きな川につながっている。その流れのさらにずっと先では、一気に世界が広がって——。

しかし、それがどのような世界なのかというところになって、私には想像もつかなくなつた。ただただ真っ白い画用紙のようなものが、一面に広がるばかりである。

それでも、雪香ならばその世界に足を踏み入れることができるのかもしれない。小川の流れに沿って歩み続けたならば、きっと。わからないことばかりだが、それでも確かなのは、私が雪香に望む理想とする生き方が、少なくとも私達が歩んできた道よりは、ずっと小川の近くを歩く生き方だということである……。

土手を少し離れたところから見下ろすように眺めていた私は、あの日卯水と歩いた場所には、道の代わりに先が見えないほど長い線路が敷かれてあるということに気づいた。赤黒く陽ざしを照り返すそれが、どこか寂しげに横たわっている——しかしそれでも、一度目に入るとなかなか視線を離せないほどの存在感があった。

タタタタン、タタタタン

黒光りの列車が、翡翠色の草原の間をまっすぐ縫うようにして走ってきて、私の心臓がどくりと脈打った。中には誰が乗っているのだろう。誰が乗せられているのだろう。卯水は——。

ここは、列車の中まで見通すには遠すぎる。思えば、私と卯水はあのときからすでに完全に道を違えてしまっていた。あの日卯水が心の奥底で何を思っていたか——私に卯水の本心までわかるはずもない。あのときも、今でも。私はあの日から、歩むことを完全にやめてしまったのだ。

タタタタン、タタタタン……

列車はどんどん小さくなってゆく。そしてついに、地平線の向こうへと、まっすぐに走り抜けていった。